

八天遺跡調査概要

調査要項

遺跡名 八天（はってん）遺跡
所在地 北上市更木 34 地割地内
調査期間 平成 20 年 6 月 23 日～平成 20 年 8 月 31 日（予定）
調査目的 史跡内容確認調査
調査担当 北上市立埋蔵文化財センター

I. 遺跡の位置と過去の調査

八天遺跡は、JR 北上駅から北北東へ約 6km に位置し、北上川東岸の川に面した高台の上に広がっています。開田計画により昭和 43～44 年度、昭和 50～52 年度の 2 回にわたって調査が行われました。

昭和 43～44 年度の調査では、縄文時代の遺跡の上に平安時代の遺跡があることが確認されました。特に、柵列状の柱穴が注目され、この地が古代和賀郡の役所跡ではないかと推測されました。

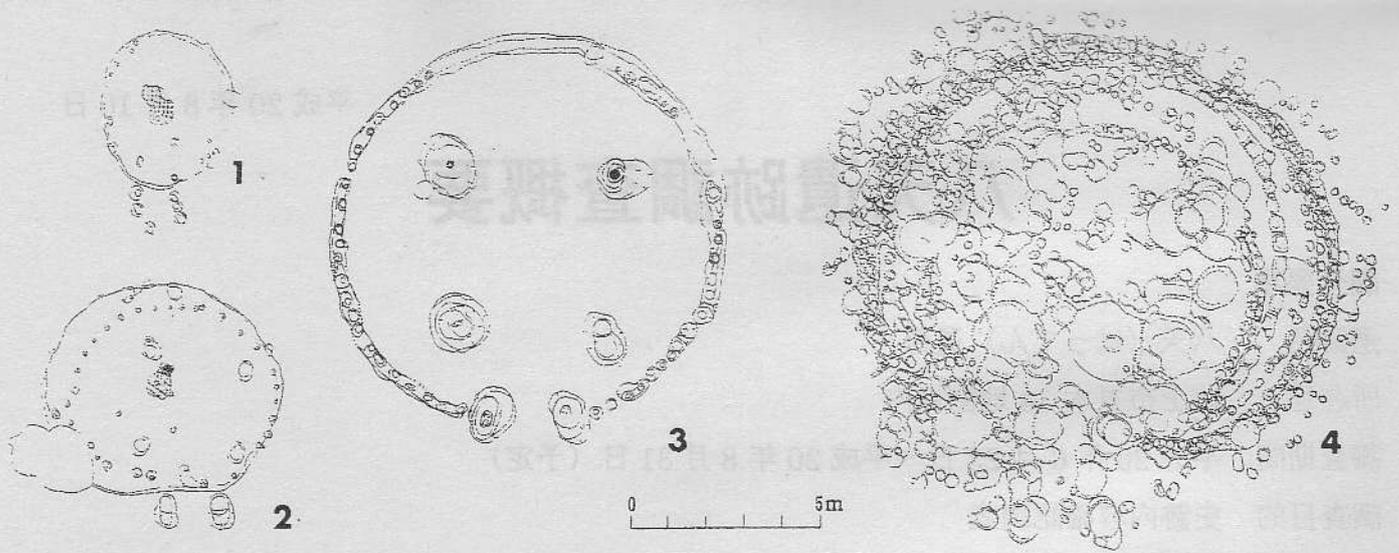
昭和 50～52 年度の調査では、中世の館跡、平安時代の村の跡、縄文時代の村の跡が調査されました。平安時代の村の跡の調査では、和賀郡の役所を示すような証拠は見つからず、この地に営まれていたのは一般的な村であったことが明らかになりました。そのかわりに大きな注目を集めたのが縄文時代の村の跡でした。

II. 昭和 50～52 年の調査内容と史跡指定

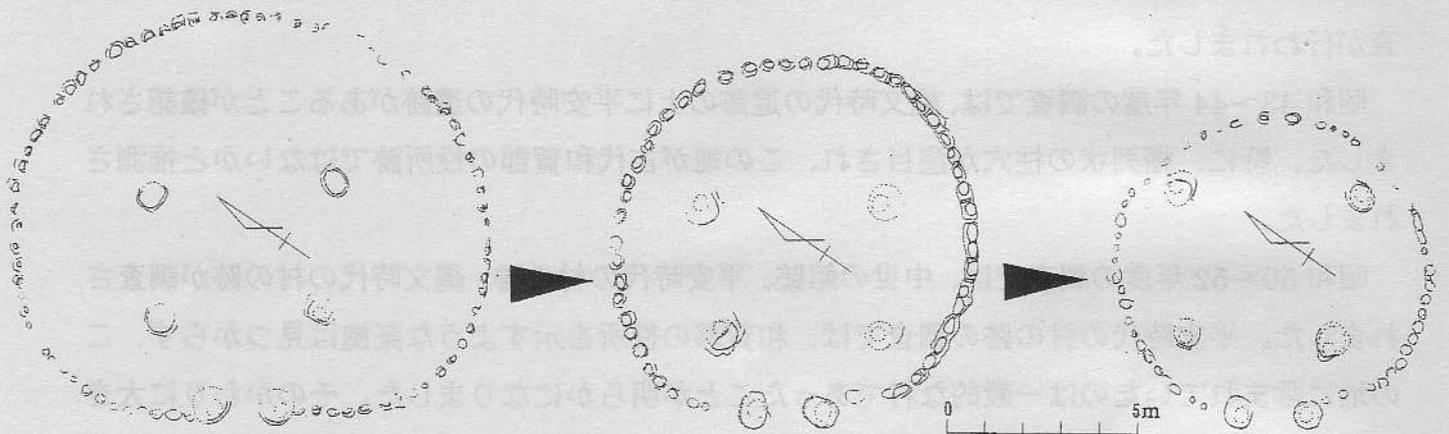
縄文時代の村は、見つかった土器の形や装飾などから、約 4,000～3,500 年前に営まれたものと判断されました。そしてこの村の跡から 3 つの重要な発見がありました。

①大形の円形建物跡

縄文時代の家の跡は、一般的には、円形または方形に床を掘りくぼめ、そこに炉や柱穴を備えています。これらは直径、または一辺の長さが 5m くらい（広さ 20 m²）のものです。ところが八天遺跡で見つかった建物跡はこれを大幅に上回る大きなものでした。当初建てられた建物は長径 17m、短径 13.5m（広さ 180 m²）と推測されています。しかしその後この建物は同じ場所で何度も建て替えられ、小さくなっていきます。しばらくは長径 11～13m、短径 9～10m（広さ 80～100 m²）の大きさに建て替えられていましたが、最終的には長径 8.4m、短径 7.6m（広さ 50 m²）ほどまでになります。つまり、当初は一般的な家 8～9 軒分にも相当した巨大な建物が、4～5 軒分の広さに落ち着き、最終的には 2～3 軒分程度にまで縮小した、ということになります。

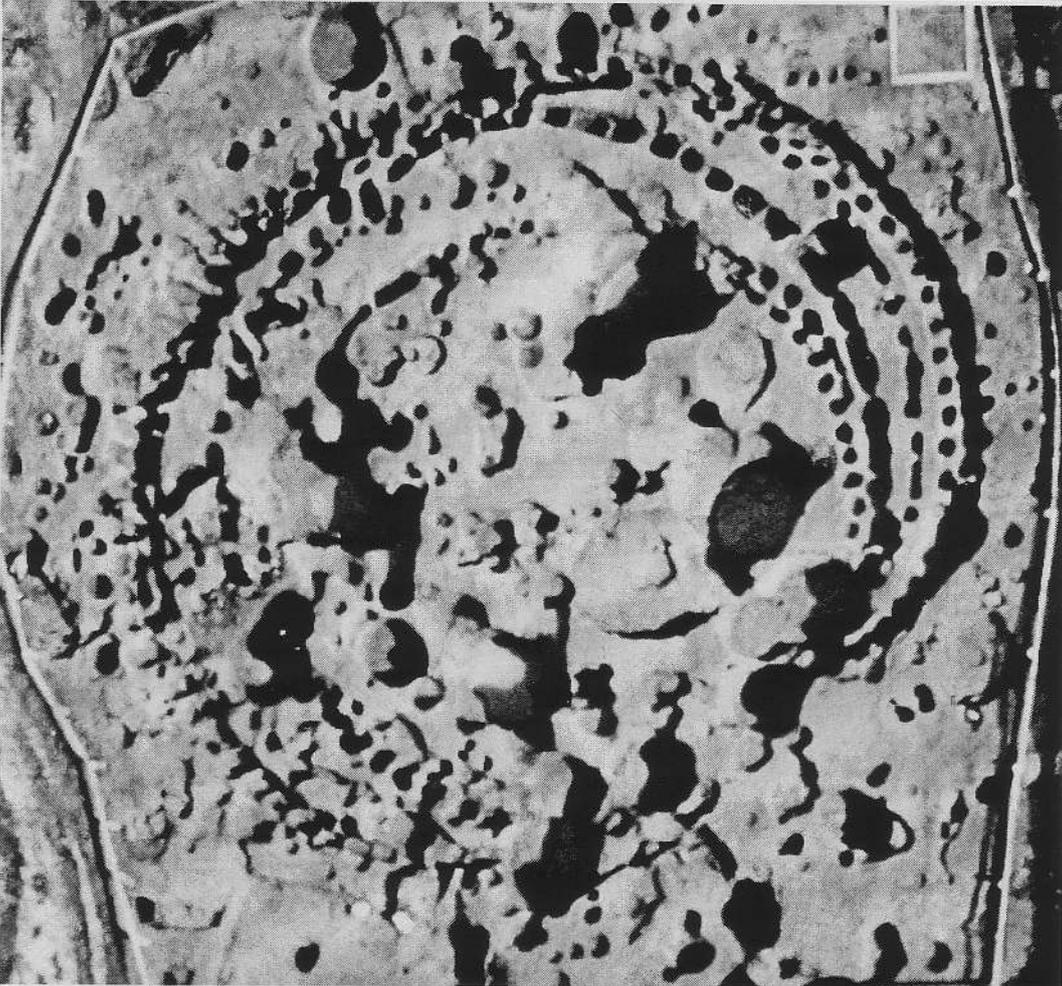
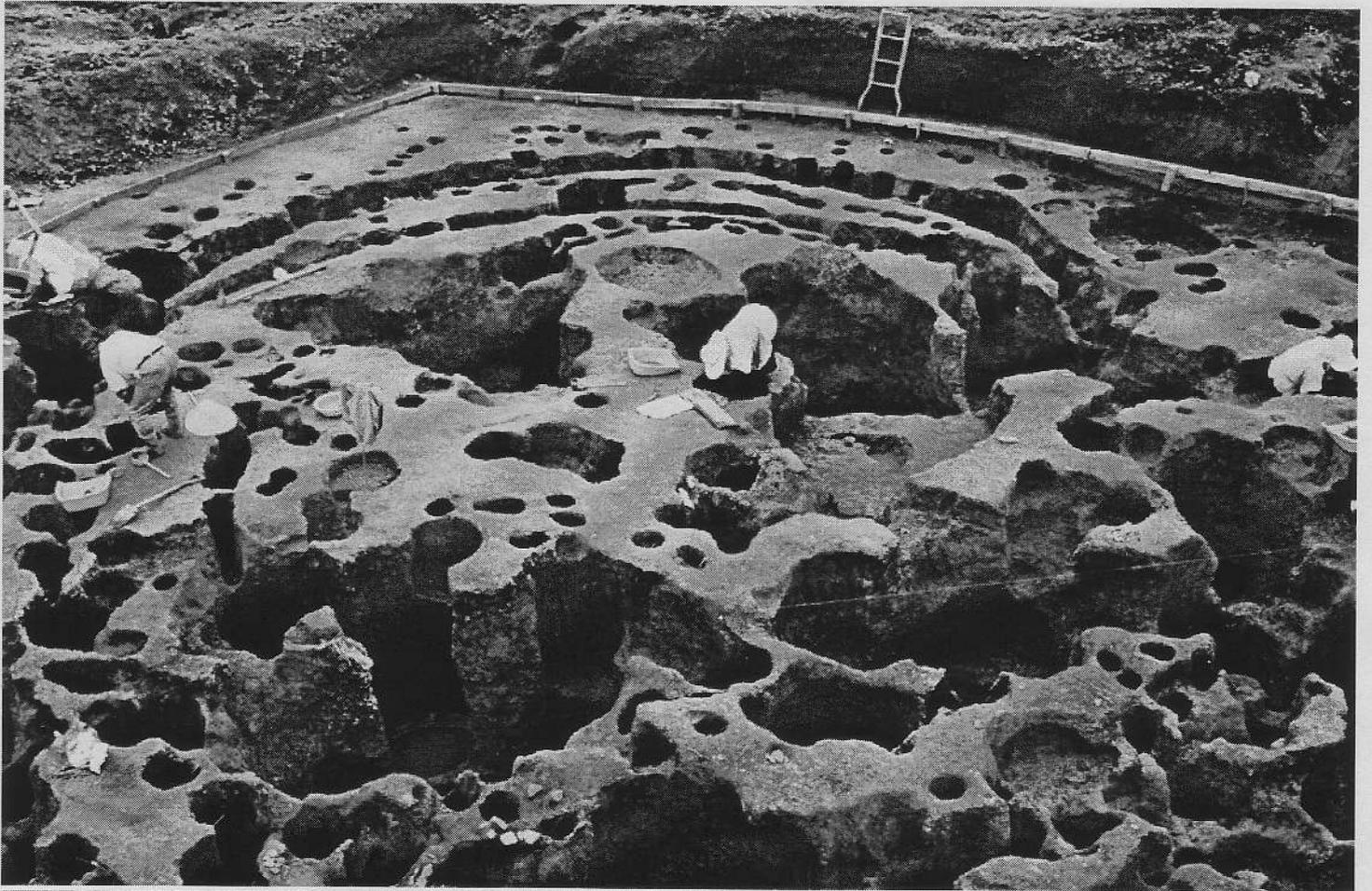


建物跡の大きさ (s=1/200) 1は径4m、2は径6mの標準サイズの家跡(奥州市江刺区久田遺跡)。地面を掘り込んだ床の中央に、火を焚いた炉があります。2には入口を含めて6本の柱穴があり、壁際に小さな柱穴が多く掘られています。3は径10.5mの大形建物跡(久田遺跡)。床を掘り込まず、柱穴だけを掘り込んでいますが、入口を含む6本柱や壁際の小さな柱穴をもつ点では2と共通します。4は八天遺跡の大形建物跡。3のような建物跡が何度も同じ場所で建て替えられています。



大形建物跡の建て替え 10回分の建物跡が同じ場所で確認されています。これは建て替えによるものです。現在でも伊勢神宮は、20年に一度建て替えを行っており(式年遷宮)、建物が建っていた期間を考える上で参考になります。左は3回目の建物跡の柱穴だけを抜き出したもの。長径12.7mの大きな建物跡です。中央は8回目の建物跡。長径は9.4mとかなり小さくなっています。右は10回目の建物跡。長径は8.4mですが、それでも標準サイズの家跡よりはずっと大きなものです。

この大形建物の意義は結局のところ、A) とても大きい建物であり、B) 何度も同じ場所で建て替えられた、という2つの特徴に集約することができます。このことは建物跡の性格を考える上で重要なヒントになります。A) の特徴からは、この建物に収容された人々の数の多さが想像されます。もしかすると八天の村のみならず北上川東岸の複数の村の人々が集まった施設、いわば集会所のようなものだったのかもしれませんが。一方、B) の特徴からは、この建物への縄文人の強い思い入れがうかがわれます。もし度重なる(10回ともいわれます)建て替えを柱の根腐れによるものと考えれば、長期間(200~500年?)にわたってこの建物が存続していたこととなります。それは、縄文人がこの建物を、極めて重要な、象徴的なものとして認識していたことを示すものと考えられます。遺跡から見つかった遺物に儀式のための道具と思われるものが見られる点から、祭祀に関連した施設だった可能性も考えられます。

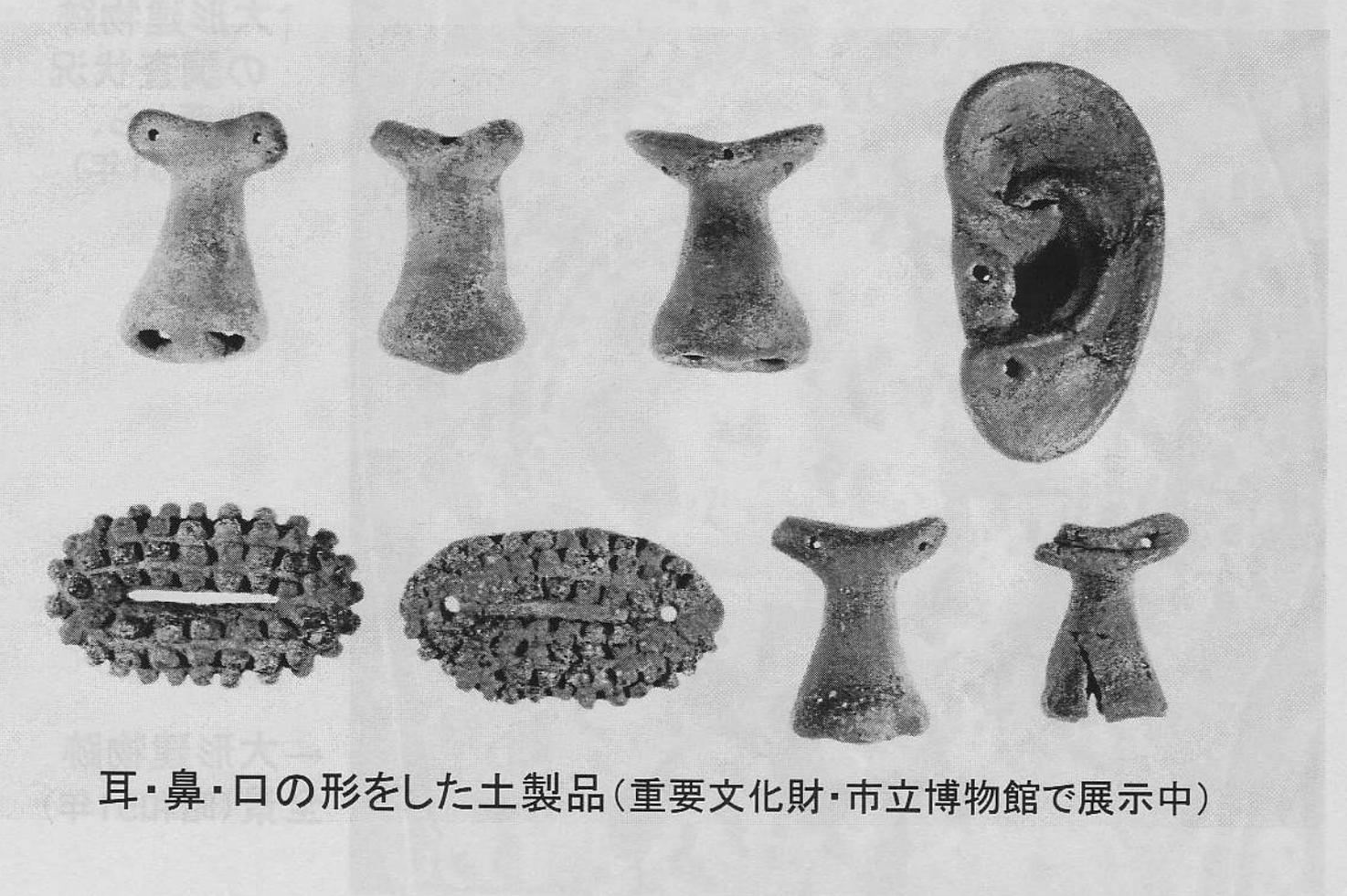


↑大形建物跡
の調査状況
(北西から、
昭和51年)

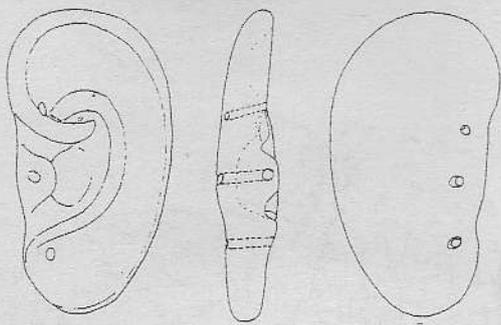
←大形建物跡
全景(昭和51年)



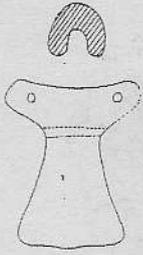
耳形土製品・鼻形土製品の発見状況



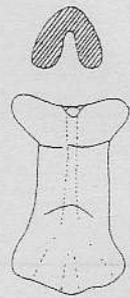
耳・鼻・口の形をした土製品(重要文化財・市立博物館で展示中)



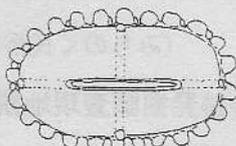
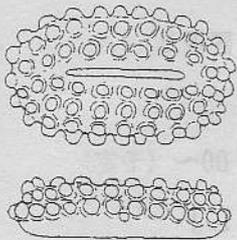
土製の耳 (J-34-イ遺構・S=1/2)
耳の凹凸を写實的に表現して
いる



土製の鼻 (J-34-イ遺構・S=1/2)
裏側は窪んでおり、鼻の穴と
つながっている



土製の鼻 (J-34-イ遺構・S=1/2)
これも裏側は窪んでおり、鼻
の穴とつながっている。



土製の口 (J-34-イ遺構・S=1/2)
表面に張り付けられたコブは
ヒゲを表現したものか？

②耳・鼻・口をかたどった土製の焼き物

大形建物跡の西側では多数の穴が見つかります。これらは建物の柱穴や、食糧を貯えるためのムロや、縄文人の墓穴ではないかと考えられています。こうした穴の中から土器などとともに、人間の耳・鼻・口を模した素焼の土製品が見つかりました。耳は1点、鼻は5点、口は2点と数に偏りがあります。これらはほぼ大人の実寸で作られています。また部分的に数か所、小さな穴があげられており、紐などで何かにくくりつけて使用されたものと推測されます。可能性として、儀式などに用いるための仮面の部品であったことが考えられます。

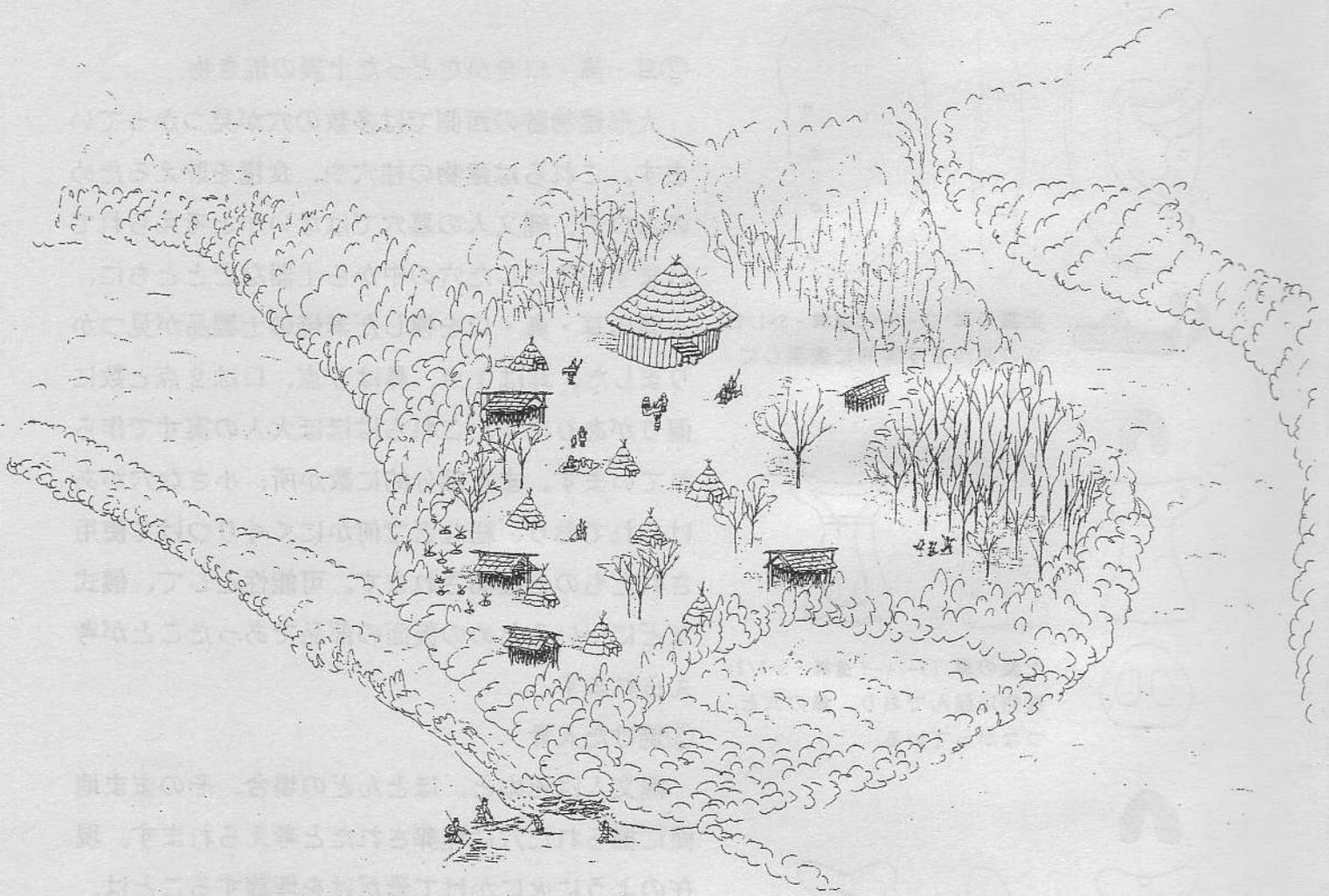
③焼けた人骨

縄文人は死ぬと、ほとんどの場合、そのまま地面に掘られた穴に埋葬されたと考えられます。現在のように火にかけて骨だけを埋葬することは、ごく稀でした。ところが、八天遺跡の穴の中には焼けた人骨の見つかったものがあります。これがただちに火葬と結び付けられるわけではありませんが、興味深い発見です。

以上のような調査成果により、遺跡の重要性が認められ、昭和53年2月22日に八天遺跡は史跡として国の指定を受けました。また、耳形土製品1点・鼻形土製品5点・口形土製品2点は平成4年6月22日に重要文化財に指定されました。

Ⅲ・本年度の調査内容

昭和51年度に調査された大形建物跡、耳・鼻・口形土製品の見つかった穴、焼けた人骨の見つかった穴などは、調査時に詳細に図面に記録されましたが、残念ながら埋め戻しの後、その場所を正確に特定することが不可能な状態になっていました。今回、30余年の時を経て、改めてそれらを再調査し、その位置を公共の座標に対応するように記録することにしました。遺構保護のため、大形建物跡の柱穴を全て掘りきることはいたしません。再びその姿を目の前にして、縄文時代の生活と信仰に思いを馳せていただければ幸いです。



約 3,500 年前の八天の村の様子 (想像図)



仮面の使用方法と祭りの様子 (想像図)

埋蔵センター行事予定

埋蔵文化財写真展…生涯学習センターにて開催中

(8月31日まで)

埋蔵文化財センター公開…9月6日(土)

(みちのく民俗村まつり開催日)

国見山廃寺跡発掘調査現地説明会

…10月11日(土) 10:00～(予定)

埋蔵文化財展:「掘り出された暮らし」

…1月8日(木)～12日(月)

江釣子ショッピングセンター・パル・コスモホール

発掘調査報告会と講演会

…1月10日(土)

江釣子ショッピングセンター・パル・会議室

(報告会:平成20年度の市内の発掘調査

講演会:講師・題目未定)

問い合わせ先:北上市立埋蔵文化財センター0197-65-0098